

故郷の絆 深く広く

9月に新潟市で開催された県人会大交流祭に合わせ、新潟日報は「故郷よ」をテーマにした連載や特集を掲載した。国内外で活躍する県出身者らの姿を伝え、故郷・新潟への思いを紹介。多くの県人が集った大交流祭では、在住・出身にかかわらず県人相互の絆を再認識し「県人会連合会」が提案された。機運の高まりをさらに一歩進めようと、新潟日報社は11月4日に初めての国際交流拠点事務所を米ニューヨーク(NY)に設置した。開設の意義を事務所代表に就いた大坪賢次・NY新潟県人会会長(66)に語ってもらった。NYに在任の県人にクリスマスを迎える現地の様子をレポートしてもらった。

新潟日報社 国際交流拠点NY事務所代表

大坪 賢次さん(66)



おつぼ・けんじ 1944年、塩沢町(現南魚沼市)生まれ。六日町高校から日本大学に進み、卒業後の68年に渡米。ルイジアナ州立大学やスタンフォード・ビジネススクールで学び、ワシントン大学ロースクール卒業。85年にニューヨークで大坪不動産を設立した。ことし11月には新潟日報国際交流拠点NY事務所代表に就任。

「交流拠点ができ、新潟日報を通じて新潟をはじめ、全国にいるいろいろな情報を伝えられるのは意義深い」と話す大坪賢次さん。新潟市西区善久の新潟日報社。

「新潟」から日本を元気に

新潟日報社が開設した国際交流拠点はNY新潟県人会の全面協力で、米国と新潟から互いに情報を発信し合い、絆を深める新たな試みだ。「世界の中で日本が後れを取りつつある。NYから情報を送り、新潟から日本を元気づけるような役割を果たしたい」。大坪さんは熱く語る。

互いに情報交換

なことをやるのか」と多くの質問を受けました」と反響の大きさを振り返る。事務所は、マンハッタンにあるセントラルパーク近くにある大坪さんのオフィス内に設けた。取り組みとして、既に先月末から本紙の地区版に掲載された各地の話題を毎週火曜と金曜にこの交流拠点事務所や、県人会関係者に向けて配信を開始。一方、来春からは本紙紙面の企画として、世界の経済と文化をリードするNYの「今」を現地在任の県人の

声で紹介する予定だ。さらにNY新潟県人会を中心として、NYにある各県人会との横のつながりや、新潟日報の持つ地方紙連携のネットワークを融合させ、地域の枠を超えた情報交換も見据えている。NYに海外事務所を置く他都道府県などは、ふるさとの名品や名物をPRするイベントの開催を行っている。交流拠点の開設を契機に、NYから米国全土に向けて「新潟」を発信する企画などの構想も膨らむ。

米国全土へ発信

大坪さんは「おいしい食べ物や素晴らしい工芸品、民芸品など新潟には良いものがたくさんある。もっとNYに住む日本人に伝え、そこからアメリカ人に知ってもらおうというのも大切な役目ではないか」と話す。開設から1カ月余り。なかなか日本の若い人が海外に出なくなると聞いている。新潟県人の動向をはじめ、NYの文化や芸術、経済など、若い人たちの刺激になるような情報を送れるようにしたい。

ニューヨークから

Xマス リポート



ニッキー香月さん 新潟市東区出身

多種多様の料理で祝杯

日本の冬のホリデーの代表といえは、やはりお正月。高校時代まで新潟で暮らしていましたが、毎年の正月料理が楽しみでした。具だくさんの雑煮やのつべい、切り干し大根、黒豆、干し鮭などを毎年、両親が作ってくれました。今でも、正月が来るたびに郷土料理が懐かしくなります。ことしはニューヨーク生活も16年目。ニューヨークは入種のある「つぼ」といわれていて、文化や宗教も多種多様です。その中でもたくさんの人たちに祝われるのはクリスマス、ユタヤ人のハヌカ、アジア系で言えば中国と韓国の人々が祝う旧正月ですので、イベントの料理もさまざまです。クリスマスはもともキリスト教系の祝日で、基本的には12月25日に家族や親戚などで家で過ごします。料理は家によって違いますがローストチキンやハム、マッシュポテト、フルーツケーキ、パイ、アップルサイダーなど。またエッグフックグッグといったラム酒、ウイスキー、ミルク、砂糖、生卵などを混ぜたカクテルを飲む人たちもいます。南米系の人には、とうもろこし粉で作った中に肉、チーズなどが入ったたまごのようなタマゴマフをテーブルに並べます。ハヌカはユタヤ人にとって歴史的な民族の生存とユタヤ教の自由をたたえるための最も喜ぶべき祝日。毎年12月に8日間わたって祝われます。通常の食事もユタヤ人の多くはコーシヤードと言って肉、チーズ、ミルクを他たたくさん食品をユタヤ教の戒律にそって精製、加工されたものを使います。



夜の通りを照らし出すワシントン通りのイルミネーション

勝るとも劣りません。経済破綻発生後、毎月のお金をやりくりし苦勞する一般人を「マスコミ」と呼んでいます。ワシントン通りでクリスマスツリーの明かりの3倍はあると思われ天使祭りを創り出すのは、まさかチカチカの電灯を身にまとったこのスマイルビーブルたち。中国などからの輸入により入手できる価格になった飾り付け用品で、一年に一度の精いっぱい楽しみ時には、ディスプレイです。

12月に入ると、ワシントンと名がつく通りがうごめいてくるようです。この通りには、この辺りでは小さな家がひしめき感じて立ち並んでいます。さして、通りに沿って立つ小さい白い垣根に、緑に赤のクリスマスリースがつけられるのが、この始まり。次いで隣家やお向かいさんと、40軒くらいの家が夜のイルミネーションを主体とするクリスマス装飾に腕を競うのです。



江崎 真佐子さん =佐渡市出身=



電飾競い合い通り彩る

で縁取りされ、その電球もいもの。トナカイがそりを、バリのシャンゼリゼ通実にさまざまな色のついた引く金網製の像が、明るいりのデコレーションに、その後、州立大で西洋建築を学ぶもの。点滅するもの、しな光をつけて前庭に並ぶ、屋の密度とその熱き思いではぶ



国際交流拠点事務所のパネルを手にする大坪賢次・NY県人会長(左)と高橋道映・新潟日報社長=11月4日

屋根、切り妻、窓枠、玄関先。家のあらゆる部分に小さい電球をつけた電線

来季の喜びを味わわせたいながら、行き交うのです。まぜ、この季節到来の喜びを味わわせたいながら、行き交うのです。